

## 「英語コミュニケーション教育」の課題

北本晃治（帝塚山短期大学）

本シンポジウムに於ける発表では、まず、日本における英語教育の分野で「英語コミュニケーション」という概念が登場するに至った経緯について概観し、それらの変化を特に人間間の言語・非言語両方の相互作用を取り扱うコミュニケーション論の視点から見た場合どのようなことがいえるのかについて指摘した。そしてさらに、これまでの英語教育のアプローチを4つの視点から分類し、それらが人間の意識・無意識の領域で、一体どの様なレベルに働きかけることを意図しているのかを検討した上で、第2言語としての「英語コミュニケーション教育」に内在する問題点について考察した。それらについての概略は以下のようであった。

### 日本に於ける英語教育の変遷

ここでは、英語教育の変遷をそれぞれ、受信型（Written Englishを主に学習対象とし、Reading、Writing中心の翻訳教育に重点を置く）、発信型（Oral Englishを主に学習対象とし、Listening、Speaking中心の会話教育に重点を置く）、相互作用型（Communicative Englishを主に学習対象とし、Interaction、Culture、Speech、Discussion、Debate中心のコミュニケーション教育に重点を置く）の3つの概念で3期に分類整理した。

これらの過去からの英語教育の変化を端的に述べると、Written Englishを中心とする受動的な教育から、その反動によって形成されたSpoken Englishへの傾倒、そしてその両者をコミュニケーションという概念を軸として統合しようとする現在の動きということができ、外国語としての英語教育が試行錯誤を通して、表面的な言語使用を超えて、母国語を含めたあらゆる言語が本来目的としているコミュニケーションそのもの深まりを求めようになったということ述べた。

### コミュニケーション論からみた英語教育

コミュニケーション中心の英語教育といっても、その実体をどのように捉えるかによって、それに基づいた教育方法は大きく左右され、そこで用いられる理論的枠組が当然重要になってくる。そこで、ここでは3つの分野から提出されているコミュニケーションモデル（マスコミュニケーション分野：記号化体、解釈体、記号解読体の3つのパーツによる円環的な機械的情報処理モデル、応用言語学分野：メッセージが個人内及び個人間の主体的な意味づけによる相互作用によって作られることを示したモデル、臨床心理学分野：個人内の要素をさらに自我と無意識という個人内コミュニケーションとして捉え、個人間においても、それぞれの自我と無意識との間に重なり合う重層的コミュニケーションを考えたモデル）を使って、そこから導き出される事柄について比較検討し、特に第3番目のモデルを土台として英語教育を考えることの必要性について主張した。

### 4つの教育アプローチとそれぞれの作用するレベル

ここでは、教授法を4つの範疇（機械的アプローチ：行動主義的反復練習を主体とするもの、形態的アプローチ：対象の持つ法則性を認知レベルで教えるもの、文脈的アプローチ：個人の置かれた特定の文化的コンテクストの中での人間間の相互作用に重点を置いた

もの、有機的アプローチ：カウンセリング的手法などを交えて、個人の内的な自己実現などの基本的欲求を刺激することに重点を置いたもの）で分類整理し、前述の臨床心理学のモデルとの関連性について指摘した。

すなわち、個人の心理的要素が、意識（自我の活動）、前意識（常に検索可能な記憶）、個人的無意識（個人の生誕以来の出来事がかつては意識されていたが、現在は抑圧または忘却されているもの）文化的無意識（それぞれが生まれ育った特定の文化によって擦り込まれている民族的な反応形式を形づくるもの）、普遍的無意識（先天的に個人のこころの奥底に存在し、人類が普遍的に共通にもっている様々な基本的欲求からなるもの）から構成されており、「意識・前意識」の部分を思考レベル、「個人的無意識・文化的無意識」の部分を感情（心理）レベル、「普遍的無意識」の部分を感覚（生理）レベルと考えることができることを示し、さらに、前述の4つの教育アプローチがそれぞれ働きかけを意図していると考えられるこれら個人の内的要素のレベルについて、機械的アプローチは、意識による反復練習により目標とする習癖を獲得しようとするものであること、形態的アプローチは、意識・前意識間の相互作用により、言語やコミュニケーションの法則を思考レベルで捉えようとするものであること、文脈的アプローチは、文化的無意識までを考慮に入れ、与えられた文化的状況にそぐう行動パターンや言語表現を身につけさせようとするものであること、有機的アプローチは、人間存在を全体的に捉え感覚レベルの様々な欲求や可能性が沈んでいる普遍的無意識までを配慮した方法論であることを説明した。またコミュニケーションの様式が、意識レベルに近づくほどより言語的になり、反対により深い層の無意識にいたるほど非言語的になることも併せて指摘した。

#### 「英語コミュニケーション教育」の課題

以上の考察を基にして、「英語教育とコミュニケーション教育の関連性」と「教育カリキュラムと教員間の連携」という2点について取りあげた。

前者については、言語そのものを対象とした意識的教育に重点が置かれすぎると、それは学生達の様々な内的要素や興味と接点の薄い無味乾燥な教育となりやすく、反対に、その言語をコミュニケーションの一手段と捉え、人間間の無意識的相互作用を視野に置いた教育を進めれば、そこでは非言語的要素が大きくなり、言語教育として收拾がつきにくくなるというコミュニケーション教育と外国語教育を結び付ける場合の必然的な二律背反について述べた。

後者については、コミュニケーションを主体とした英語教育を考える場合、カリキュラム全体が、学生が主体的にコミュニケーション活動を行うことができ、なおかつ各々のクラスの中での英語習得のプロセスが学生達の自主的な活動と連携するようにプログラムされている必要があることを指摘し、コミュニケーションにむけた総合的な教育カリキュラムの中で、教育の意識的なレベルから無意識的なレベルへといたる範囲を、それを指導する教員達がお互いの専門や適性に従って埋め合うようなシステムづくりのために連携することの重要性について主張した。